

No. 20

平成19年10月発行

静岡県老人福祉施設協議会

〒420-0856 静岡市葵区駿府町 1-70

静岡県総合社会福祉会館内

TEL 054-653-2311 FAX 054-653-2312

E-mail : sizurosi@vesta.ocn.ne.jp

# しづ老施協

## 卷頭言

### 在宅事業部会の 発足について



静岡県老人福祉施設協議会  
在宅事業部会

部会長 水谷 猛

二〇〇七年三月、デイサービスセンター連絡協議会は老人福祉施設協議会との組織一元化により解散となり、新たに老施協の「在宅事業部会」として発足しました。部会員には、単独のデイもありますが、多くが併設の施設です。会費は従来以上にはしないとの老施協のご理解をいただき負担は増えないことになり、結果として併設施設では値下げとなりました。

以前は、老人福祉施設協議会「在宅福祉部会」としてデイサービスセンターと在宅介護支援センターが会員となっていましたが、二〇〇〇年三月に県が音頭を取り、静岡県在宅介護支援センター連絡協議会が設立され、在宅福祉部会の会員が重複したため在宅福祉部会は休会とし、代わりに静岡県デイサービスセンター連絡協議会としてデイ単独で活動していました。しかし、国や他県等が老施協とデイ協が一元化する中で、静岡県でも一元化が検討され、この度やっと一元化にこぎつけた次第です。今後は在宅事業部会として、養護部会、特養部会、軽費部会との情報のやり取りが簡単に出来るようになりました。

今までデイ協として活動してきましたが、部会になつたからといって内容が今までと違うものになるはずはありません。研修会等も単独で開催していたため、他の部会と内容が重複することが多々あつたことも事実です。今後は同じ土俵ですので効率的に、またデイに偏った研修でなく幅広い意味のある研修も可能となります。ただ理事会でテーマ等を検討することになりますので、理事だけではどうしてもよい知恵が浮かばないこともあります。是非、会員の

皆様のご要望等を積極的に事務局にお届け下さるようお願いします。国の歳入不足により介護報酬の切り下げが続く状況の中での在宅介護施設だといつて本的に必要な介護を提供するには、介護福祉施設が協力し合つてこそ初めて可能なのではないでしようか。

我々は、経営は経営者に任せて、いま利用者が何を望んでいるか、何を期待しているか、いかに利用者の気持ちを汲んで満足をあたえることができるかが、利用者を引き付ける秘訣ではないかと考えています。力不足だと思いますが、理事をはじめ会員の皆様の協力があつてこそ在宅事業部会が円滑に滑り出すことがであります。事業部会が円滑に滑り出すことができるものと確信しております。

今後とも会員の皆様と手を携えて、在宅事業部会の発展に努力していくきますので、改めまして皆様のご協力をお願ひいたします。

(浜名湖園デイサービスセンター長)

## 特集 1

# 地域包括支援センターを立ち上げて

二〇〇五年六月の改正介護保険法の成立により新たに設置されることとなつた「地域包括支援センター」実際に運営されている施設に課題や問題点について報告してもらいました。

## 高齢者を地域で支える システム作りの試み

あしたか地域包括支援センター

所長 深沢康久

春風会は、平成十八年度に沼津市から二ヶ所の包括支援センターの業務委託を受けました。

センターの業務は、介護予防事業、総合相談事業、権利擁護事業、包括的・継続的ケアマネジメント事業、地域ネットワークづくりです。しかし昨年度は、介護予防のケアプラン作成の仕事に追われ、他の事業が疎かになりました。現在、センターが直接作成しているケアプランの件数は、職員四人で百五十件であり、他の事業所に委託している件数が百件です。今後予想される問題は、要支援者の数が増加していく、報酬単価が低いためケアマネ事業所が予防のケアプラン作成を拒否してきたとき、センターでは職員を四人から五人、六人へと増員しなけれ

ばならなく、経営的に大変厳しくなることです。

経営面で検討していかなければならぬ課題はいくつもありますが、センターの役割と機能は、今後ますます重要になってくることは言うまでもありません。まず、センターは、地域包括ケアを支える中核的機関として、その実現を期待されています。

あしたか地域包括支援センターでは、地域で高齢者を支えるシステム作りをテーマに活動しています。このテーマの実現を目指して、これまで私たちが地域で取り組んできたことは、介護者教室の開催や地域の自治会が開催する高齢者対象の地域サロン活動などへの支援、介護保険制度の説明会や認知症サポーター養成講座の実施、小地域福祉ネットワークづくりの研修会など、地域住民や民生委員、介護支援専門員などが一緒に研修会に出て、地域の課題についてグループワークを行つてきました。

包括支援センターは、介護予防のケープラン作成だけでなく、上記の活動

を通して地域に入り込み、地域住民と一緒にになって高齢者を支えるシステム作りをしていくことが、地域に信頼され、期待されるセンターになるものと言えます。

のところは介護予防の契約やプラン作成に追われ、理想と現実のギャップを感じた一年でした。あれもしなくては、これもしなくてはと常に追われながら、これでいいのかしらと自問自答しながら対応する毎日でした。

初めの頃は、センターを地域の人達に知つて貰うことが必要と思い、自治会や民生委員の会合に顔を出し、医療機関等にも挨拶回りをしました。徐々にセンターが地域の人達に周知されると、センターや民生委員やご家族・知人等から電話や来所による相談が増えました。

## 地域包括支援センター の一年



磐田市北部地域包括支援センター

管理者 柳原たづ子

地域包括支援センターは、チームアプローチやネットワークを構築し、地域の中核機関になるという構想が掲げられスタートしました。しかし、実際

のところは介護予防の契約やプラン作成に追われ、理想と現実のギャップを感じた一年でした。あれもしなくては、これもしなくてはと常に追われながら、これでいいのかしらと自問自答しながら対応する毎日でした。

初めの頃は、センターを地域の人達に知つて貰うことが必要と思い、自治会や民生委員の会合に顔を出し、医療機関等にも挨拶回りをしました。徐々にセンターが地域の人達に周知されると、センターや民生委員やご家族・知人等から電話や来所による相談が増えました。

私が最初に民生委員から相談を受けた困難事例は、要介護Iの母親と軽度の認知症の息子の世帯でした。定職につかず、親の年金を搾取している孫が同居しており、食べる物もなく生活環境も最悪の状態でした。理解力のないご本人の生活状況をアセスメントする事はとても時間がかかりました。民生委員・家族・行政・社協・ケアマネジヤー等関係者を交えて何度も話し合いをした結果、老いた親子の支援をするためには、孫が同居していくにはサービス利用に限界がある。また、孫の年金搾取を予防するために、権利擁護事業の制度を導入する必要があると判断しました。親族の方の協力を得て、孫の上、独立することが可能になりました。本人のみでなく、それを取り囲む人たちをどのように巻き込んで支援をしていくかがセンターとしてとても大事なことだと思いました。

また、認知症の問題では、一人暮らしの認知症相談が困難事例でした。毎日車を運転しどこにでも行ってしまう所の方々や民生委員・サービス事業所の協力が得られ、何とかグループホームへの入所を可能にしました。

センターに来る相談内容は多岐にわたりますが、最近の傾向は、家族関係がわかりにくく、キーパーソンが見えない、キーパーソンがない、キーパーソンとしての自覚がないことが在宅生活をより困難にしている状況がみられます。また、一つの家族に問題が重複しているため、家族ぐるみの支援が必要だというケースがとても多くなりました。自分たちにとつても驚くような事例も数多くあり、そのたびにどう対処して良いのか途方にくれながらも三職種情報を共有し、意見を出し合い、また行政や地域の民生委員を巻き込んで問題解決にあたりました。一度地域と良い関係が出来ると、その後のケースもスムーズにいき、とても良い波及効果がありました。事例が複雑になればなるほどいろいろな機関との連携が必要になってきます。そのためには、地域に積極的に出て行き、その地域をよく理解し、地域のさまざまな団体や組織と一緒に連携をとりながら問題解決にあたること、ネットワーク作りの重要さを感じました。地域の民生委員から「センターが出来て、いろいろ相談に乗ってくれ本当に助かる。」という声も聞かれるようになり、私達の何よりの励みになっています。

当事業所では、介護予防プランの作成に追われて他の業務に支障が出ることのないように、平成十九年度からケアマネジャーを一人増員して四人体制とし、介護予防プラン以外の業務がスマートにできるようにしました。

自分たちの仕事が、地域に活かされているということが実感できる、あるいは意義あると感じられるような仕事が出来ればいいなど考えます。

当事業所では、介護予防プランの作成に追われて他の業務に支障が出ることのないように、平成十九年度からケアマネジャーを一人増員して四人体制とし、介護予防プラン以外の業務がスマートにできるようにしました。

自分たちの仕事が、地域に活かされているということが実感できる、あるいは意義あると感じられるような仕事が出来ればいいなど考えます。

## 地域包括支援センター

### 二年目の課題

静岡市葵区城西地域包括支援センター

センター長 下川床香織

地域包括支援センターが創設され、ひたすら走り続けた一年目。毎日押し寄せせる予防プランの作成に明け暮れ、業務量と職員数のバランスの取れない中、苦しみながらも受託プラン一千八百二十三件、委託七百九十三件、特定高齢者プラン六件、計二千六百二十七件を作成し、同時進行で一千四百三十一件の相談に対応しました。

二年目となり、職員も二名増員され、気持ちの上で多少のゆとりは出たものの、相談件数は七月に入り、ひと月に二百件を超える忙しさは変わりません。一年目で積み残してきた課題を取りこぼしのないようにと、相変わらず気の抜けない日々が続いていますが、これは当センターだけでなく、どこのセンターも「予防重視型システムへの転換」

「地域包括ケア」等の旗印の下、地域での本来業務の展開に苦慮していることが予想されます。

当センターは静岡市のほぼ中心に位置しており、高齢者人口一万一千四百六十九人、高齢化率二十七・七%のエリアであります。「住み慣れた地域で暮らし続ける。」という大きなテーマの下、少子高齢化は進み続ける。三年後、五年後の地域を予測した時、今、センターは何をすべきなのだろう。何ができるのだろう。

八月末に、エリア内の一地域の方々と三年後、五年後の地域を想像した時、どうすれば自分たちがこの地域で暮らしていくべきなのかを「当事者として」

考えていただきました。参加者は、町内会長、老人会長、民生委員会長、地区社会長等の「長」のつく方々を中心に二十四名でグループワークを行い、制度やサービスに頼るだけでなく、隣近所の暖かい見守りの目や、何かの時に支え合える存在の重要性を確認し合いながら、それぞれの町内の課題等に花が咲きました。認知症の問題、消費者被害、暴力やネグレクト等の虐待問題等と絡めて、認知症センターの方のお話や、センターからも情報を提供させていただき、住民の方々の意識を高めていたただく機会としました。もともとまとまりの良い地域で、これを機に各会、各町内に持ち帰り「地域が地域を支える」「住民が住民を支える」意識を広めていただき、センターも一緒になり、地域に溶け込めていけたらと第一歩の取り組みが始まったところです。



城西地域包括支援セ



## 特集2

# 施設間交流研修

本年度で五回目となる施設間交流研修事業。今年も二十八施設十五組で行われています。

参加した人達はどのような感想を持っているのでしょうか。

## 施設間交流研修を 経験して

磐田市老人ホーム「樂寿荘」

斎藤定子

私が研修した先は、浜松市にある「養護盲老人ホーム第二静光園」でした。今まで、支援員研修という形で他の施設を訪問したことはありました。が、その場合、施設内見学と職員からの説明が主で、入所者との交流はほとんどありませんでした。今回の研修は、三日間という短い期間でしたが、入所者との交流や生活の様子を見ることが、とてもいい勉強になりました。

研修に行くまでは、視覚障害者施設のため、初めて行く自分が入所者に受け入れてもらえるのか不安でしたが、興味深くいろいろ話し掛けてくれ、こちらから話しかけてもすぐに答えを返してくれ、最初の不安はなくなりました。

生活全般に、常に声かけ誘導が必要な方が多く、移動一つとっても誘導し

なくてはならない方もいました。トイレも誘導が必要な方もいましたが、紙パンツの使用者がほとんどいないことに驚きました。特に注意が必要な入浴時は、浴室はもちろん、脱衣所の棚まで誘導していく、視覚障害者への介護の大変さを知らされました。食事に関しては（勿論職員が全て配膳するのですが）食器の配置がほぼ決まっていて、食事の前にその日の献立の内容と置いてある位置等の説明が栄養士さんからが、その場合、施設内見学と職員からの説明が主で、入所者との交流はほとんどありませんでした。今回の研修は、

約束しました。すると、私が教えに行くのを待っていて、とても好奇心旺盛に聞いてくださり、亀が出来上がるところを何回も折りなおして練習する。』と、とても喜んでくれました。

大正琴を弾いてくれた方や折り紙をしていた方の他にも、自分の生き甲斐を見つけて楽しんで暮らしていることに、とても感心させられました。

施設設備は、居室前に点字ブロックがあつたり、手すりに点字があつたり、中には自分の居室が分かる様にマスクット等を吊るしてある方もいました。それから、建物が中庭を中心一周で

あります。

職員の方々も、入所者のことを考え、戸の開け方一つにしても奥に人が居ることを想定して気を配つたり、掃除の時にも掃除機のコードに足を取られないよう気をつけたり、耳からの情報が入りやすいため、個人的なことは入所者の前で話さないなど、教えられたことがたくさんありました。

今回のこの研修を通して、自分の施設を見直すきっかけとなり、自分自身もこの仕事についた頃の初心を忘れないようにしたいと思いました。快く相手をしてくれた第二静光園の入所者の皆さん、そして親切にご指導下さった職員の皆さんに、この紙面であらためて感謝の気持ちを伝えたいと思います。

## 有益だった

### 施設間交流研修

特別養護老人ホーム 福聚荘

塩澤えり子



れ、本人にも研修の間に教えることを約束しました。すると、私が教えに行くのを待っていて、とても好奇心旺盛に聞いてくださり、亀が出来上がるところを何回も折りなおして練習する。』と、とても喜んでくれました。

大正琴を弾いてくれた方や折り紙をしていた方の他にも、自分の生き甲斐を見つけて楽しんで暮らしていることに、とても感心させられました。

施設設備は、居室前に点字ブロックがあつたり、手すりに点字があつたり、中には自分の居室が分かる様にマスクット等を吊るしてある方もいました。それから、建物が中庭を中心一周で

あります。

静岡市の小坂の郷へ交流研修に行くことになりました。小坂の郷は、ユニットケアを実施している施設です。私の施設は従来型なので、ユニットケアの知識が少なく、どんな介護を行っているのか、とても関心がありました。集団ケアと個別ケアの違いや、食事、排泄、入浴、レクなどの介助方法。利用者と職員とのかかわり方、個室により引きこもりがちにならないか、見守りはどうしているか、日常業務はどのように行っているのかなどを教えていた

だければと思つていました。

始めに、施設長様より施設を案内していただきました。施設内は清潔で静かでした。ユニット内はゆったりとして、利用者の方は、居間でお茶を飲みながらテレビを見て過ごされておりました。その横で、職員は掃除をしながら見守りをしています。トイレ介助は、一人ひとりに合わせて行つております。入浴もユニット内の個浴で、職員とマンツーマンでゆっくり入浴されておりました。食事はユニット内の食堂で、皆さん揃つて召し上がっていらっしゃいました。食後も、一人ひとり別々にテレビを見る方や、お部屋で横になる方など自由にされていました。私は、利用者さんと散歩に出かけ、お話をたくさんすることができました。

プライバシーを確保しながら、家庭的雰囲気作り、楽しく過ごせる居場所づくりをしていました。小坂の郷の主任の方の説明では、第一にすることは職員全員の意識改革で「お世話をすることではなく、お世話をさせていただく。」と思う気持ちだそうです。

自分の施設には何が必要なのか。業務の見直しを行い、意識の改革、すべて利用者の立場になって考えるようにして行きたいと思いました。小坂の郷の職員の方と話ができ、同じ悩みや問題点があることも分かりました。これからも交流を図り、問題点を解決していければよいと思います。

他の施設を見ることにより、自分の施設を改めて見直すことができ、とてもよい経験ができたと思います。

これからも交流研修を続けてほしいと 思います。

## 施設間交流研修について

特別養護老人ホーム あかなすの里

渡邊貴志

福祉関係の職務が現在の従来型老人ホームが初めてで、今回の施設間研修で他施設の職務を体験できたことは、本当に貴重な経験になりました。

入職当初は、利用者様の日常生活の手助けだと、軽い気持ちで職務についていました。実際の職務は時間に追われ、利用者様より職員の都合で日々の職務を行つております。三年も同じ職場にいると、それが当たり前のような錯覚になり、自分自身「これでいいのか」と疑問を抱いておりました。でも、今回、他施設との交流研修に参加できること決まってからは、期待と不安で一杯でした。

高齢者介護に携わるものとして、食の安全を考えさせられることが多々あります。

雪印乳業で食中毒事件が発生したこ

とをはじめ、最近では冷凍の牛肉コロッケ事件や北海道の有名な菓子メーカーによる日付改ざんなど、また中国から

の輸入食品の安全性が問われている。

そんな中で、国際的のもつとも有効な衛生管理手法といわれるHACCP（ハサップ）システムを県を上げて導入を図ることが注目を集めている。

衛生管理を行う食品製造施設を県が認証し、県のホームページで公表する。

従来は、主に出荷直前の製品の抜き

姿があり、この姿を見ていれば、利用者様も安心され、穏やかな笑顔で過ごされるのだと実感しました。

今後は、業務に追われながらも自分が持てる勇気を持って、利用者様が心から安心して毎日が過ごせる手助けをしていきたいと思います。

では違うはあるけど、根本的な利用者様への接し方は同じであることを痛感しました。

## リレーコラム

### 食の安全を考える

特別養護老人ホーム「高原荘」

施設長 斎藤文彦

取り検査により行われてきたが、HACCPシステムは原料の入荷から製造・出荷までのすべての工程においてあらかじめ危害を予測し、重点的に管理するものである。

このHACCPシステムを導入すれば食品の安全性は従来の製造方法よりも高まるが、製造された食品の安全性が完全に確保されたわけではなく、なによりもわれわれの免疫力のアップや生きる意欲、食べる意欲が最も大切ではないか。あらゆる角度から食の安全を考えていきたい。



## 施設名称の由来と想い

「花」を愛する心が  
人へのおもいやりへ

ケアハウス 花みずき  
施設長 藤森達芳

当社会福祉法人「茗翠会」は、平成十三年に、二十一世紀の少子・高齢化を見据え、高齢者福祉に理解を持つ有志が集い新しく法人を設立し、ケアハウスとデイサービス事業を始めました。

以来、入居者や利用者の立場にたつた処遇に心掛け、「待ちの福祉」から「手を差し伸べる」積極的な福祉サービスと、さまざまなニーズに応えるべく職務に邁進してきました。

事業所は、旧磐田市の北部にある磐田原台地に位置し、周辺には茶園が広がるところから、名称を「茗翠会（めいすいかい）」としました。

緑色濃き自然に恵まれ、一番茶を刈り取る四月頃には、すがすがしい茶の香りが漂います。

また、施設名の「花みずき」は、「花水木」から採りました。「花水木」は、別称アメリカヤマボウシという落葉高木であつて、大正初年、尾崎行雄東京市長がワシントンに桜を寄贈した際、その返礼として日本に送られたも

のです。庭木や公園樹として植えられ、五月頃にピンクや白い花を咲かせます。この「花水木」が、磐田市中心部から施設へ至る見付街道に街路樹として植栽され、地域住民やドライバーの目を楽しませていることから、名付けました。

今施設でも、数本の「花水木」が施設を象徴する花に成長し、入居者が育てる草花とともに、心を和ませてくれます。

真に花を愛する優しい心が人への思いやりとなり、それが明るく住み良い集合高齢者住宅につながっていくものと確信しています。

開設六年目を迎える本施設は、益々事業の充実が求められています。



「人が人を介護する。介護させていただく。」その責任は重く、今、成すべきことについて福祉の原点に立ち返り、果たすべき新しい役割を再認識することが大切と肝に命じて、職員一同頑張っております。

## ●我が施設のコニーク行事

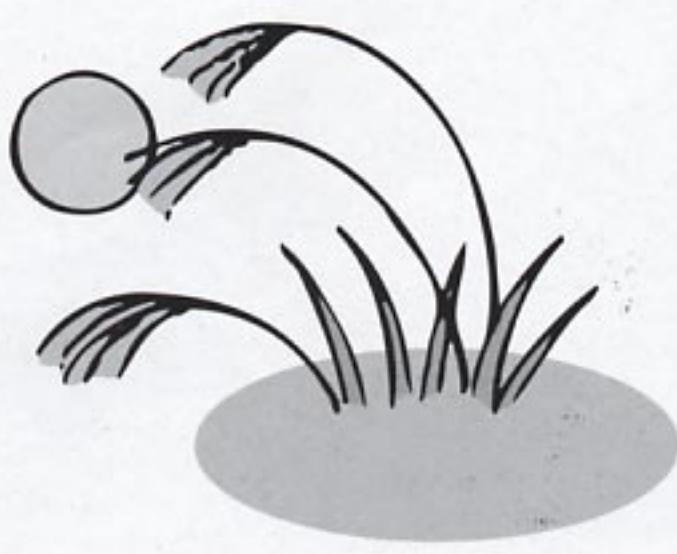
### 『朝の歩行訓練』

第二静光園は、県内唯一の視覚障害者のための養護老人ホームです。入所者の多くの方が全盲であるため、どうしても日常の行動範囲が狭くなり、歩



養護盲老人ホーム「第二静光園」

く機会が少なくなってしまいます。そのため朝の時間のラジオ体操と腰痛予防の体操の他、園外への歩行訓練を行っています。園外へは白杖を使い、園内では手摺歩行などで歩くようにして、健康な身体を保つようにしております。利用者の皆さんは、園の回廊の廊下を、自分の体調に合わせて、今日も元気歩いています。



## 仲亀会長叙勲受賞記念祝賀会

平成十九年七月十日、グランドホテル富士（孔雀の間）において、「仲亀透氏瑞宝双光章受賞祝賀会」が開かれました。小室直義富士宮市長の発起人代表挨拶の後、中村博彦全国老人福祉施設協議会会长、望月義夫国土交通副大臣、坂本ゆき子参議院議員らから祝辞を受け、社会福祉法人芙蓉会理事長戸巻美夫氏の乾杯で祝宴が始まりました。参加者は、フルートの演奏の中、豪華な食事と楽しい会話を楽しみ、宴は、終始なごやかな雰囲気に包まれました。

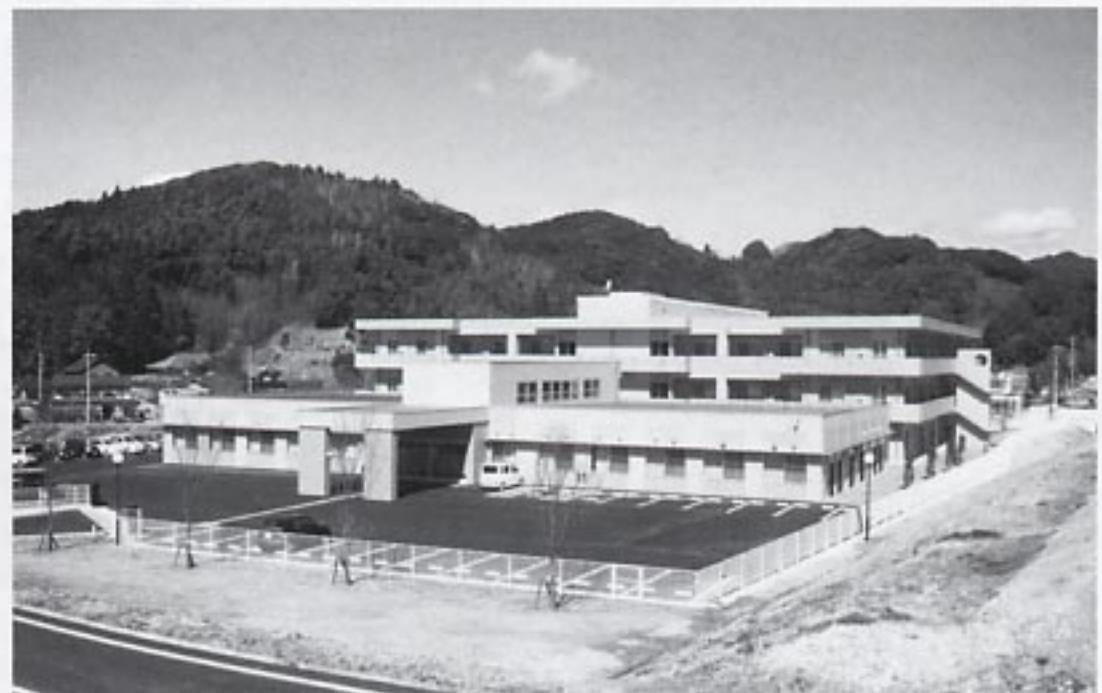


特別養護老人ホーム  
**陽光園**  
法人名 社会福祉法人  
「珀寿会」  
開設日 平成19年7月9日  
所在地 沼津市岡宮字下松沢  
1417番地の1  
入所定員 90名（うちショート10名）  
デイサービス 30名



## 新加入施設紹介

平成十九年十月一日現在



特別養護老人ホーム  
**掛川福祉ノ郷**  
法人名 社会福祉法人  
「大善福祉会」  
開設日 平成19年3月12日  
所在地 掛川市上西郷  
792番地の1  
入所定員 長期入所 100名  
短期入所 20名

# 活動報告

## [21世紀委員会]

★ 理事会 平成十九年六月二十日、静岡県教育会館にて開催し、会長表彰、役員の旅費支給等について協議しました。

★ 理事会 平成十九年六月二十日、総合社会福祉会館にて開催し、研修計画等について協議しました。

### 【特養部会】

★ 理事会 平成十九年六月二十日、総合社会福祉会館にて開催し、研修計画等について協議しました。

### 【在宅事業部会】

★ 理事会 平成十九年六月十五日、総合社会福祉会館にて、平成十九年度事業計画について協議しました。

★ 理事会 平成十九年七月六日、静岡市民文化会館にて開催し、職員研修及び施設長研修について協議しました。

★ 職員研修会 平成十九年八月三十一日、静岡労政会館にて、百七名が参加し研修会を実施しました。午前は、「魅力あるデイサービスづくりの実際」という演題で、足高山ディサービスセンター・船岳公一郎施設長による講演、午後は、三分科会十四班に分れ情報交換を行いました。

### 【企画経営委員会】

★ 平成十九年六月六日、静岡市民文化会館にて、十九年度事業計画について協議しました。

### 【関東ブロック研究総会実行委員会】

★ 平成十九年六月十三日、静岡市民文化会館にて、開催時期及び場所について協議しました。

★ 平成十九年六月二十一日、第三回委員会を県総合社会福祉会館にて開催し、事業実施について協議しました。

★ 平成十九年七月二十五日、第四回委員会を県総合社会福祉会館にて開催し、事業実施について協議しました。

★ 平成十九年八月二十四日、第五回委員会を県総合社会福祉会館にて開催し、事業実施について協議しました。

★ 平成十九年九月二十六日、第六回委員会をもくせい会館にて開催し、事業実施について協議しました。

★ 平成十九年九月二十六日、第六回委員会をもくせい会館にて開催し、事業実施について協議しました。

### 【研修委員会】

★ 職員研修会 平成十九年七月三十一日、静岡労政会館にて「食に関する研修会」を実施しました。午前は、

静岡県立大学副学長木苗直秀氏による講演、午後は、各施設の事例報告を行い、百八十五名の参加者が熱心に受講しました。

### 【編集委員会】

★ 平成十九年九月二十五日、第二回「しづ老施協」編集委員会を県総合社会福祉会館にて開催し、二十号の編集と二十一号の企画について協議しました。

● 新潟県中越沖地震への人的支援について

新潟県及び全国老施協からの支援要請に対し、十八施設から二十八名の職員派遣の申し出がありました。この内、次の方々に実際に現地で支援活動に従事していただきました。

ぬまづホーム

杉山 卓也氏（8月11～15日）  
浜松十字の園

三浦 直子氏（8月13～19日）  
川出 雅代氏（8月25～31日）

りんどう 曽根 純氏（8月15～24日）  
一空園

鈴木 美佳氏（8月16～19日）  
伊豆中央ケアセンター

内田 尚吾氏（8月16～18日）  
丸子の里

大村 貴美氏（8月18～20日）  
福寿荘

井上 貴博氏（8月25～31日）  
白扇閣

石上 敦士氏（8月17～19日）  
天竜厚生会

藤澤 良介氏（8月17～21日）  
聖ルカホーム

川村 豊伸氏（8月25～31日）

みなさんご苦労さまでした。

● 平成十九年九月十八日～十九日、三重野、木下両副委員長以下四名の委員が第四十三回関東ブロック老人福祉施設研究総会（千葉市）を視察しました。

● 昨年十二月施設長に就任したばかりで、まだ勉強中です。とは言つても、就任したその日から即実践が求められます。お蔭様で十ヶ月、このたびは機関紙の編集委員として、編集に携わることとなりました。よろしくお願ひします。（Y・E）

● 介護職員の確保など諸問題に加えて、この夏の猛暑には自然に顔をしかめてしまします。そんな時、こんな言葉を思い出します。

「明るい笑顔が周りを明るくする。暗い顔が周りを暗くする。自分の顔は自分を見るためでなく、みんなに見ていただくためにある。」

介護に携わる者として、どんな時にも、いつでも、誰にも優しく笑顔で接するよう心掛けたいのです。（Y・E）

● 地球温暖化が原因で特に暑かつた今年の日本の夏。熱中症で在宅の老人夫婦が死亡するという悲しいニュースもありました。世界各地で起きていたる異常現象は、自分勝手で我儘な人間が長い間行つてきた自然破壊、自然逆行のつけ?

後世のためにも、地球のためにも自然をもつと大切にしましょう。

(H・K)

編集後記